

語り傳へたる  
とや

一八 遊ぶ子ども

佛は常にいませども  
人の音せぬあかつきに

現ならぬぞあはれなる  
ほのかに夢に見え給ふ

萬劫年經る

萬劫年經る龜山の  
苔むす岩屋に松生ひて

下は泉の深ければ  
梢に鶴こそ遊ぶなれ

水をむすぶ

松の木蔭に立寄りて

岩もる水をむすぶ間に

扇の風も忘られて

夏なき年とぞ思ひぬる

遊をせんとや生れけん  
遊ぶ子どもの聲聞けば

戲せんとや生れけん  
わが身さへこそ揺がるれ

風に靡くもの 松の梢の高き枝 竹の梢とか 海に  
帆かけて走る船 空にはうき雲 野邊には花すゝき

月影ゆかしくば 南面に池を掘れ 北の岡の上に松を植ゑよ

鳥は見る世に色黒し 鶯は年は経れどもなほ白し  
鴨の首をば短しとて繼ぐものか 鶴の足をば長しと

て切るものか

熊野へ参らんと思へども 徒歩より参れば道遠し  
すぐれて山きびし 馬にて参れば苦行ならず 空よ  
り参らん羽たべ若王子（若王子）  
（粟鹿秘抄）

徒歩より参る

若王子

今の和歌山縣  
東牟婁郡本宮  
村にある若王  
子神社。

落花の雲云々

「またや見ん  
交野のみ野の  
櫻狩花の雪ち  
る春の曙」  
原後成、新古  
今集

交野

今の大阪府北  
河内郡交野村。

紅葉の錦云々

「朝まだき風  
の山の寒けれ  
ば紅葉の錦き  
ぬ人ぞなき」  
（藤原公任、  
拾遺集）

駒も云々

「買物たえず  
そなふる東路  
の勢多の長橋  
昔もとるに」  
（平兼盛、風  
雅集）

うねの野云々

「近江より朝  
立ちくればう  
ねの野にたづ  
ぞなくなる明  
けぬこの夜は」  
（大歌所の歌、  
古今集）

時雨も云々

「白曇も時雨  
もいたくもる  
山の下葉のこ  
らず色づきに  
けり」  
（紀貫之、  
古今集）

不破の云々

「人住まぬ不  
破の關原の板  
庇荒れに後  
はたゞ秋の風」  
（藤原良經、  
新古今集）